若者の転職に関する意識と行動

―― 高校卒業後のショート・ライフストーリーから ――

小　西　尚　之

Young Men's Mind and Action about Change of Career

―― The Short Life Stories of Senior High School Graduates ――

Naoyuki Konishi

高崎健康福祉大学紀要　第16号　別刷

2017 年 3 月

若者の転職に関する意識と行動
―― 高校卒業後のショート・ライフストーリーから ――

小　西　尚　之

（受理日　2016 年 9 月 30 日，受稿日　2016 年 12 月 22 日）

Young Men's Mind and Action about Change of Career
―― The Short Life Stories of Senior High School Graduates ――

Naoyuki Konishi

(Received Sept. 30, 2016, Accepted Dec. 22, 2016)

1．はじめに

本稿の目的は，ある総合学科高校を卒業した若者たちの進路選択の状況を分析することにより，卒業後の進路選択や勤務状況が彼らの職業観，特に転職に対する意識の変化にどのような影響を与えているのかを探ることにある．

若者の仕事をめぐる状況はこの 10 年で改善しているようにも見える．確かに若者の失業率は下がっている．総務省の「労働力調査」によれば，完全失業率（全年齢･男女計）は 2005 年の 4.4％から 2015 年には 3.4％に減少した．年齢別では，25～34 歳が 5.6％から 4.6％に減少し，15～24 歳では 8.7％から 5.5％にまで下がっている．

一方で，雇用形態に目を向けると，非正規労働者の割合が増加している現実もある．厚生労働省の「就業形態の多様化に関する総合実態調査」によると，全労働者のうち正社員以外の労働者が占める割合は，2003 年は 34.1％であったが，2014 年には 39.8％に増加している．さらに，2010 年の同調査で年齢別に就業形態を見ると（全体の非正社員率は 38.4％），非正社員の割合は 30～50 代では 20％を下回るのに対し，25～29 歳では 26.0％になり，20～24 歳では 46.7％という数字になっている．20 代前半の若者の半数近くが非正規雇用の状態で働いていることになる．

経済状況が改善され，日本という社会全体の雇用環境が多少良くなったとしても，依然として非正規労働を強いられているのは主に 20 代の若者たちである．彼らのこれまでの進路選択や職業選択，現在の仕事の状況，そして転職など今後の職業的展望はどうなっているのか．本稿では，同じ高校を卒業し，現在は別々の仕事に就いている若者たちの，高校卒業後から 20 代半ばまでの「ショート･ライフストーリー」[1] をもとに，現代の若者たちの進路選択や職業観について考えてみたい．

以下では，まず第 2 節で本研究の調査方法とデータについて述べる．続く第 3 節では本稿で用いる分析の視点について確認する．さらに第

4 節で調査対象者のライフストーリーを概観した上で，第 5 節ではライフストーリーを分析の視点にもとづき検討する．そして最後に第 6 節で本研究の課題や今後の展望を述べ，まとめとしたい．

2．調査方法

この節では，調査対象校の概要と本稿で用いた調査データの種類について確認しておく．調査対象校の F 校は，地方都市の郊外に所在する総合学科の高校である．生徒の学力層は幅広く，地区の中学校で中位から下位の成績の者が入学してくる．総合学科の系列（科目選択の目安でありコースのようなもの）は普通科目系，商業系，工業系，福祉系の 4 つである．

追跡調査は 2004 年 4 月に調査対象校 F 校に入学し 2007 年 3 月に卒業した生徒全員に対し，在学中から卒業後の約 10 年間に渡って現在も行われている．今回の分析に用いる調査データは以下の 3 種類である．なお，質問紙調査の分析対象は①，②両方の調査に回答した 128 人である．また，本稿では主に③のインタビューデータをもとにショート・ライフストーリーを構成している．

①在学中の 3 回の質問紙調査

第 1 回（1 年次）は 2004 年 10 月，第 2 回（2 年次）は 2005 年 11 月，そして第 3 回（3 年次）は卒業間近の 2007 年 1 月に記名式で実施した．学校でホームルームの時間に担任教諭に質問紙を配布し回収してもらった．3 回すべての回答者は 191 人（男子 100 人，女子 91 人）で，調査対象者数（入学者数）200 人に対する有効回収率は 95.5％である．

②卒業約 3 年後の質問紙調査

2010 年 9 ～10 月に記名式で実施した．調査対象者数（卒業者数）192 人のうち住所を確認できた 184 人に調査票を郵送し，128 人（男子 58 人，女子 70 人）から郵送で回収した．郵送数 184 人に対する有効回収率は 69.6％である．

③卒業約 6 ～ 7 年後のインタビュー調査

2013 年 10 月～2014 年 9 月にかけて，計 5 人の男性[2] にインタビューを行った．対象者は F 校同窓会関係者の紹介によるものである．実施場所は，筆者の勤務先（当時）の大学（研究室）や社会教育施設，ファミリーレストラン，対象者の自宅である．回数は 1 人 1 回で，時間は 1 回につき約 1 ～ 2 時間である．1 名（D 君）のみ約 30 分の補足インタビューを行っている．あらかじめこちらが用意した大まかな質問項目に従い，時間軸に沿って自由に話を進めてもらう形のライフストーリー・インタビューを行った．

3．分析の視点

前節では調査データについて確認したが，本節ではデータを分析する際の視点について述べる．本稿では，成人期の発達に関する先駆的な研究であるレビンソン（1992）に注目する．レビンソンは，成人前期から中年期の発達段階を次の 9 つの段階に区別している（表 1 参照）．レビンソンの発達段階の特徴は，「安定期（生活構造が築かれる時期）」と「過渡期（生活構造が変わる時期）」が交互に現れる点にある（レビンソン，1992，p.98）．

各発達段階には独自の発達課題が存在する．今回のインタビュー対象者は，調査時点で 24 ～26 歳になるので，表 1 のレビンソンの区分で

表1　レビンソンによる成人の発達段階

発達段階	年齢
老年への過渡期	60〜65 歳
中年の最盛期	55〜60 歳
五十歳の過渡期	50〜55 歳
中年に入る時期	45〜50 歳
人生半ばの過渡期	40〜45 歳
一家を構える時期	33〜40 歳
三十歳の過渡期	28〜33 歳
おとなの世界へ入る時期	22〜28 歳
成人への過渡期	17〜22 歳

出所）レビンソン（1992）（上）p.111 の図より作成．

は「おとなの世界へ入る時期」に該当する．この時期には次の 2 つの対照的な発達課題が存在する．つまり,「おとなの生活への可能性を模索する」ことと「安定した生活構造をつくり上げる」ことである（レビンソン，1992，p.113）．この時期の青年は「可能性」と「安定」という対立した課題と向き合う段階だということになる．

就職して間もない 20 代半ばの時期には,自分の仕事を「安定」させることとともに，仕事に慣れてくることによって，その他の「可能性」を探る，ということも考えられる．具体的な行動としては，転職の可能性について考えたり，実際に転職行動を起こしたりすることが考えられる．そこで，以下では「可能性」と「安定」という対立した概念の葛藤を示すと考えられる，転職に対する意識に注目する．

調査対象者全員の高校在学中から卒業後にかけての転職に対する意識にどのような変化があったのか．まず, 2 回の質問紙調査で転職志向を聞いた「いずれ転職すると思う」という質問に対して「そう思う」あるいは「まあそう思う」と答えた割合は高校 3 年次では 24.6％であったが,卒業約 3 年後には 44.4％に増加している（表 2 参照）．卒業後，実際に仕事をしたり大学等で学んだりするうちに転職に対して肯定的な考えになったものが多いと思われる．そこで，高校卒業後の進路別に転職に対する意識を見てみることにする．

表2　転職に対する肯定的意識の変化（進路別）

	就職	大学	短大	専門	全体
高 3	39.0％	17.9％	20.0％	14.8％	24.6％
卒後	56.1％	28.6％	46.7％	40.7％	44.4％
N	41	28	30	27	126

注）「フリーター・アルバイト」「その他」の進路 2 人は除く．

表 2 を見ると，まず高校卒業後に就職した者は在学中から転職志向を持つ者が約 4 割と多く，実際に就職して約 3 年後には半数以上が転職に対して肯定的な考えになっている．それに対して，大学・短大・専門学校に進学した者は在学中から転職志向が強い者が少ない（すべて 2 割以下）．進学者の中での特徴的な違いは，大学進学者が高校卒業後もそれほど転職に対する肯定的意識が強くならない（3 割以下）にもかかわらず，短大・専門学校進学者は，卒業後はほぼ倍増している点である（4 割以上）．これは，進学者の場合,高校卒業 3 年後の調査時点では，大学進学者はまだ在学中であるが，短大・専門学校進学者は多くの場合何らかの職に就いているからだと考えられる．つまり，大学生よりも実際の職業生活に入ったばかりの短大・専門学校進学者の方が職業や転職に関してリアルに考えることができるということであろう．これらのグループは在学期間の短さからも就職者と大学進学者の中間に位置するグループと言える．

そこで，以下では転職に対する意識において対照的な 2 つのグループ，すなわち高校卒業後に就職した者と大学に進学した者に焦点を当て,「可能性」と「安定」という 2 つの視点から，

それぞれの個別の進路選択の事例を見ていくことにする．

4．高校在学時の進路希望と卒業後の進路選択

前節までで本研究のデータと方法について確認してきたが，本節ではインタビュー対象者の概要を述べた後，3人のライフストーリーについて検討していく．高校卒業後約6～7年後に，就職した者3人（A君，D君，E君）と大学に進学した者2人（B君，C君）の計5人にインタビュー調査を行った．F校在学中の系列は，就職した3人が工業系，進学した2人が普通科目系である．対象者5人の進路希望・進路選択の状況は表3のとおりである．

表4はインタビュー対象者5人の転職に対する意識の変化と実際の転職の有無を示したものである．A君とB君は高校3年間・卒後を通じて転職に関して否定的な回答である．一方，C君とE君は在学中は否定的であったが，卒後3年の時点では肯定的な回答に変化している．D君は4回すべての質問紙調査で否定的な回答であったが，その後は実際に転職している．本稿では，高卒後，転職に対する意識が肯定的に変化したC君とE君，そして実際に転職をしたD君の3人のライフストーリーに注目し，高校卒業後に転職に対する意識がどのように変化していったのかを見ていく．

表3　インタビュー対象者の進路希望・進路選択状況

	入学直前	高校1年	高校2年	高校3年	卒業直後	卒後3年	卒後6年
A君	就職	就職	就職	就職	工場就職	工場勤務	工場勤務
B君	進学	大学	大学	大学	大学進学	大学在学	コンビニ店員
C君	未定	大学	大学	大学	大学進学	大学在学	自動車販売
D君	進学	専門	就職	就職	工場就職	工場勤務＋大学在学	保険販売
E君	進学	専門	未定	就職	工場就職	工場勤務	工場勤務

注）入学直前～高校2年は進路希望，高校3年は内定先である．入学直前の進路希望は中学3年次の3月にA校が調査したものである．

表4　インタビュー対象者の転職に対する意識・行動

	高校1年	高校2年	高校3年	卒後3年	実際の転職経験（インタビュー時）
A君	△	△	△	×	なし
B君	△	×	×	×	なし
C君	△	△	△	○	なし（準備中）
D君	×	△	×	△	あり（1回）
E君	△	△	△	○	なし

注）記号は「いずれ転職すると思う」という質問に対する回答で，◎＝そう思う，○＝まあそう思う，△＝あまりそう思わない，×＝そう思わない，である．

以下では，実際に転職したD君に加え，高卒後，転職に積極的な回答を示したC君とE君の事例を検討する．まず高校卒業後に就職したE君，次に大学に進学したC君，そして最後に高卒後は就職したが，その後働きながら大学へ進学したD君の事例を見る．この節では，実際の分析に先立ち，3人の高校在学中からインタビュー時までのショート・ライフストーリーを概観しておく．

4.1　E君の進路希望・進路選択

(1)　高校在学中の進路希望

E君はF高校入学前の中学3年次の調査では高校卒業後の進路を「進学」と回答していたが，「進学とか就職，そこまで考えていなかったのもあったんで」と，実際は明確な展望があったわけではなかった．

高校入学後は1年次「専門」→2年次「未定」→3年次「就職（内定）」と毎年進路（希望）を変更している．その当時の気持ちを順番に思い出してもらうと，1年次は「どこか専門学校か何かどこかへ行って，そこから就職みたいなことを考えていたんじゃないかな」と言うように，この時点でも明確な意識があるわけではないようである．しかし，この当時から将来の仕事に対する希望が少しずつ芽生えてきている様子も見える．専門学校で「そういう技術身に付けて，何か仕事をやろうみたいな感じだったと思うんです」と述べている．

2年次で「未定」になったのは，専門学校進学について疑問を感じ，「大学，その，まあ短大か何かか，就職かっていう感じですね」と言うように，進学か就職かで迷っていたようである．その後，「2年の終わりぐらいに，ようやく，まあ就職しようかなっていう感じになった」ようである．このように，2年の終わり頃になって就職希望に決まってきたのは，彼が1年次に選択したカリキュラムの影響が大きいようである．つまり，総合学科では1年次に将来の進路希望を考えながら，2・3年次の科目を選択する場合が多いが，1年次に専門学校希望であったE君は大学入試に対応した科目ではなく，「基礎科目ぐらいしか取っていなかった」のである．また，進学をやめた理由に関しては，親に迷惑かけるよりは，「もう就職して稼いだ方がいいかな」と考えたようだ．

⑵ 高校卒業後の進路選択（就職）

3年次の就職活動では，担任教員の紹介で，当初から希望していた会社ではなかったが，地元の同じ製造業の会社に入社が決まった．当初希望していた2つの会社は他の生徒に決まってしまい，「急きょ行く感じになった」G社の会社見学では「どっちかっていうと，何かちょっと違う感じがしていたんですよね」という印象であったが，「同じ生産（業）だから大丈夫かなって思って」入社することにした．

⑶ 勤務状況

G社に入社して5年間は同じ部署にいたが，3年前に現在の部署に異動となる．入社以来，三交代制の勤務であるが，「それに合わせた勤務になっている」ということであった．入社して8年目であり，職場ではもう「中堅」という立場になっているということである．仕事自体には「もう慣れた」ので，概ね満足しているようであった．

⑷ 転職に対する意識

E君は転職の可能性に関しては，「どうなるのか自分でも分からない」と述べている．「まあ，辞めても，どこか探そうという気持ちもあるんで」と言うように，それほど強い転職志向は見られない．しかし，会社内の人事異動もあるが，会社自体を「変わる可能性も，まあ，あるかな」と転職自体の可能性も否定していない．

4.2 C君の進路希望・進路選択

⑴ 高校在学中の進路希望

高校入学前に家計が急変し，中学3年次の調査では「未定」としていたC君だが，高校入学後は3年間，一貫して大学進学を希望していた．高校入学後，親戚に相談し，経済的な不安がなくなったからだそうだが，もともと大学に進学したい気持ちがあったようである．1年次には国公立大学を志望していたが，2年次からは「自分の分がわかった」ので私立大学への志望と

なった．

⑵　高校卒業後の進路選択（進学）

C 君は高校卒業後は東京の大学に進学した．高校 3 年次の担任の先生に「推薦で行ければ」と相談したところ，いくつか候補を出してくれたそうである．担任教諭に「どれにしていいか，迷います」と言ったところ，その後実際に進学することになる大学を薦めてくれたようである．

⑶　大学生活

大学の勉強は「すごい楽しかった」ようである．特にゼミの指導教授との付き合いは今でも続いており，彼にとって大きな心の支えになっているようだ．高校までの「条件満たすための勉強」ではなく，「やりたくてやってる」大学の授業を中心に，大学生活は充実していたようだ．

⑷　大学卒業時の進路選択（就職）

大学卒業後は，このまま東京に残って就職したい気持ちもあったが，家庭の事情もあり地元での就職を目指した．具体的には，「食いっぱぐれのないところへ行きたい」と，公務員や銀行，電力会社などの就職先を受験したが難しく，結局は今の自動車販売の仕事に決まった．別の販売の会社にも合格したが，自動車会社を選んだのは，「車がないと多分生活していけない」のだから，自分が「少なくとも死ぬまではつぶれない」という考えからであった．

⑸　勤務状況

調査時は地元の自動車会社の営業スタッフとして勤務して 3 年近くになっていた．実は彼は「内勤」を希望していたのだが，そのような職種の採用がなかったそうだ．「内勤」を希望する理由は，「人と向かい合う仕事」は「楽しい」がどちらかというと「不得手」だと思っているからだと言う．営業の仕事は自分では「確実に向いていない」ということであり，営業を「支援する仕事」の方が向いていると考えている．

⑹　転職に対する意識

インタビュー時，実は C 君は真剣に転職を考えていた．この人生の中でやはり「やりたいことをやろう」と考え，学生時代に不合格であった公務員試験にもう一度挑戦するということである．彼の中では「30 歳までに，そういう転職だとかしないと，多分駄目だ」という考えから，これが「最後のチャンス」ということである．

4.3　D 君の進路希望・進路選択

⑴　高校在学中の進路希望

入学前の調査では高校卒業後の進路希望は「進学」であった．これは，将来は福祉関係に進むことも考えていたからということである．この時点では，大学か短大か専門学校かを決めておらず，総合学科だから「どっちでも行ける」と思っていたようだ．1 年次の進路希望は「専門学校」になっているが希望分野は福祉ではなく「工業・技術」になっている．2 年次からは「就職率がすごく良かった」と聞いたので工業系列に進み，進路希望も「就職」となった．

⑵　高校卒業後の進路選択（就職）

2 年生の時から，就職指導の先生に「G 社はいいぞ」と言われていた．G 社は E 君が入社した会社と同じ会社である．その会社は F 校の就職希望者の中では，最も成績が良い生徒が推薦される会社の一つであった．D 君も 2 年生の夏頃

から,「そこ行くために試験勉強,頑張っとった」と言う．学校の成績が良いこともあって就職指導の先生からは「入れる」とずっと言われていた．3 年次にはもう一つ別の会社と G 社を見学に行き，G 社の方が自宅から近く，さらに「給料，こっち（G 社）の方が良かったんで」G 社に決めた．

⑶ 初職での勤務状況

三交代制の工場で検査・包装作業を行う．夜勤がやはり一番大変で，当時の生活は「くちゃくちゃ」だったと振り返っていた．仕事の内容自体にも不満があったらしく,「結局，あの,（仕事が）つまらんから，おもしいとこ，ここ（パチンコ）しかなかった」と言うように，夜勤明けはなかなかすぐに帰宅して眠れないので当時はパチンコによく行っていたという．

⑷ 在職しながらの大学進学（最初の転職活動）

就職した年にはすでに転職を考えてハローワークにも行ったと言う．そこで,「やっぱ，高卒で，いいとこないなあ」ということを知り,「大学，出て，大卒として，やった方が，いいな」と感じたという．そして就職して 1 年後の 2008 年 4 月から地元の私立大学の 2 部（夜間学部）に入学することになる．

職場の上司に，大学進学について話すと,「趣味としてならいいよ」という反応で，周りには話さないように言われていた.大学には前勤(午前中心の勤務）と夜勤の時に通っていたが，テストはいつも追試で対応してもらい，4 年間で卒業することができた．

⑸ 転職

インタビュー調査時に勤務していた保険業界に興味を持ったきっかけは，子どもが生まれた時に，複数の保険を比較してみて，掛け金，補償内容などに違いがあることだったという．大学を卒業した時には「保険会社入ろうかな」と思い，大手の保険会社をいくつか検討し，高校の同窓会で知り合った先輩に連絡を取る．歳がやや離れているその先輩は大手の保険会社に勤務していた.その会社の説明会にも参加したが，結局はすぐに保険会社には転職しなかった．その後，その先輩が起業した，複数の大手の保険会社を紹介する会社に入社することになった．

⑹ 転職先での勤務状況

転職した保険会社は，店舗を構えているのではなく，事務所は一応あるが，お客さんのところに「自分から行って，やる」という感じだそうだ．普段は事務所で分析などの事務処理を行い，お客さんと会う時は自分から出かけていくということである．調査時はまだ転職して 2 か月しか経っていなかったが，少しずつ契約も取れてきたということである．

以上，E 君，C 君，D 君の 3 人について，高校在学中の進路希望の変化から，卒業後の大学生活や職業生活，そして転職に対する意識の変化についてまで見てきた．次の第 5 節ではこの 3 人のショート・ライフストーリーを，やや違う角度から検討してみる．

5．可能性と安定

前節では 3 人の男性の高校卒業後のショート・ライフストーリーから，彼らが進学や就職，転職などについてどのように考えているのかを見てきた．この節では,「可能性」と「安定」と

いう 2 つの対立した概念をもとに 3 人のライフストーリーを検討していく．

まず，高校卒業後ずっと地元の同じ会社で働いている E 君は転職の可能性について聞かれると，「今は，ない全く」と答えており，転職に関しては消極的であった．今後の人生について聞いた時は，実家を出て一人暮らしをしようかと考えており，「今，もう（経済的に）安定しているっていうのもあるんで」と述べていた．E 君の場合，今の勤務先や仕事に大きな不満はなく，将来の転職の「可能性」は残しながらも，今の「安定」した職業生活を継続していきたい，という考えのようであった．

次に，高校卒業後は東京の 4 年制大学に進学し，卒業後地元企業に就職した C 君の事例である．C 君にこれまでの人生を振り返ってもらったところ，次のように述べている．

「僕ん中では，必ずしもこの後の人生がなんだか決まっちゃってるような感じにもなってるんですよ．（中略）この後多分ずっとこうやって車を販売していって，で，生活していくのかなと．（中略）そういったところで何となしに，まあこの後の人生がもう決まっちゃってるなっていうふうなところはあるんですね．で，それに満足しているかどうかって言えば，今のところは今の環境はすごく満足していますけど，果たして今後，じゃあどうなるのかなっていうふうなこと言われると，正直言うと分からないですよ．」

（下線部引用者）

このように，インタビュー時，E 君はちょうど「可能性」と「安定」の間で揺れていた．「安定」した仕事に就き不満もないが，「やりたいこと（＝公務員）」をやる「可能性」も諦めきれないでいた．

最後に，実際に転職をした D 君の場合はどうだろうか．彼は，高校卒業後，地元企業に就職するが，その後在職しながら大学の夜間部に入学し卒業後に転職している．D 君は就職したすぐの年に転職を考えるようになり，実際に行動を起こしている．その転職活動の中で「やっぱ，高卒で，いいとこないなあ」と感じ，大卒資格を得てから転職しようと考えた．つまり，D 君にとっては，大学進学は転職という目的の手段であったようだ．その後，様々な偶然の出会いなどから，D 君は実際に転職を果たしている．D 君の事例からは，レビンソンの「成人への過渡期」（17〜22 歳）に「可能性」を追求してきた結果，「おとなの世界へ入る時期」（22〜28 歳）を迎えたインタビュー時にはむしろ職業的にも家庭的にも「安定」を重視していた様子が窺える．

6．おわりに

本稿では，3 人の男性の高校卒業後から 20 代半ばまでのショート・ライフストーリーをもとに，彼らの進路選択の状況や職業観の変化に注目してきた．特に，転職に関しては，大学に進学した 2 人は実際に行動に移していた．D 君は実際に転職しており，C 君は転職のための準備を始めていた．一方，高卒後就職した E 君は，転職の可能性に言及しながらも，当面転職をする考えはないようであった．

また，インタビュー時の 3 人の状況は，レビンソンの「可能性」と「安定」という 2 つの価値観の間で揺らいでいたということができる．D 君は将来の「可能性」を求めて転職し，転職

によって「安定」を手に入れようとしていた．C 君は「安定」した現状から脱し，やりたいことができる「可能性」を信じ，真剣に転職を考えていた．一方，E 君は今の「安定」した仕事に慣れ，満足しながらも，将来の転職の「可能性」については否定していない．

本稿のインタビュー対象者の年齢はレビンソンの「おとなの世界へ入る時期」（22〜28 歳）にあたる．20 代半ばという年代はまだ社会に出て間もない時期で，今後の人生において仕事の面でも家族などの私生活の面でも，様々な「可能性」を模索する年代である．同時に，職業世界になじみ，社会的，経済的，そして家族の獲得などを通じて心理的にも「安定」を求める時期でもある．「可能性」と「安定」の間で揺れる彼らがレビンソンの「三十歳の過渡期」（28〜33 歳）を迎える頃，どのような生活を送り，また仕事や家族，人生についてどのように考えているのか．今後も追跡していきたい．

最後に本研究の課題について，特に研究方法に関わる点を述べておく．一つ目は，インタビュー対象者数が少ないことである．今回はインタビュー対象者が 5 人で，分析対象者が 3 人である．ライフストーリーが「個人のライフ」（桜井，2012，p.6）に焦点を合わせた研究方法だとしても，個人の多様な生き方を描くにはより多くの人に話を聞く必要があるかもしれない．

もう一つは，インタビューの回数である．今回は 1 人につき 1 回のみのインタビューを 1〜2 時間行ったが（D 君のみ 2 回），個人の人生をより深くより正確に聞き取るためにはもう少し回数を重ねる必要があるかもしれない．以上のような方法論上の課題もあるが，進学や就職，そして転職などのように，個人の人生の転機における重要な決断や選択のプロセスを調べるためには，ライフストーリーという方法が有効であることは確かであろう．

付記

本文の作成にあたり，公益財団法人日本教育公務員弘済会より平成 28 年度日教弘本部奨励金を受けました．

注

1）「ショート・ライフストーリー」の概念については小西（2013）を参照のこと．

2）インタビュー対象者すべてが男性であるのは，男性には男性の，女性には女性のライフストーリーがあると考えたからである．サンプル数が 5 人と限られていることもあり，本稿ではレビンソン（1992）に倣い，男性のライフストーリーに注目した．

引用・参考文献

Atkinson, Robert. The Life Story Interview. Sage Publications, Inc., 1998, 97p.

エリクソン, エリック., エリクソン, ジョウン. ライフサイクル, その完結. 増補版, 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳. みすず書房, 2001, 202p.

グラノヴェター, マーク. 転職：ネットワークとキャリアの研究. 渡辺深訳. ミネルヴァ書房, 1998, 312p.

林　明子. 生活保護世帯の子どもの生活と進路選択：ライフストーリーに注目して. 教育学研究. 2012-03, 79(1), p.13-24.

ハーシュマン, アルバート. 離脱・発言・忠誠：企業・組織・国家における衰退への反応. 矢野修一訳. ミネルヴァ書房, 2005, 212p.

石田賢示. 学校から職業への移行における「制度的凍結」効果の再検討：初職離職リスクに関する趨勢分析. 教育社会学研究. 2014-05, 94, p.325-344.

小西二郎. 仕事は好きなんですよ. でもやっぱ, 友達と家族が一番すね：北海道小樽市の「ノンエリート」青年. 北海道大学大学院教育学研究科紀要. 2002-06, 86, p.179-250.

小西尚之.「ショート・ライフストーリー」によるインタビュー調査：アトキンソンの方法論を中心に. 富山短期大学紀要. 2013-03, 48, p.29-39.

厚生労働省. 就業形態の多様化に関する総合実態調査. http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/5-22.html（参照

2016-12-27).
レビンソン, ダニエル. ライフサイクルの心理学（上）（下）. 南博訳. 講談社, 1992, （上）341p. （下）290p.
桜井　厚. インタビューの社会学：ライフストーリーの聞き方. せりか書房. 2002, 300p.
桜井　厚. ライフストーリー論. 弘文堂. 2012, 171p.
桜井　厚, 小林多寿子編著. ライフストーリー・インタビュー：質的研究入門. せりか書房. 2005, 277p.
総務省統計局.　労働力調査.　http://www.stat.go.jp/data/roudou/index.htm（参照　2016-12-27).
田垣正晋. 生涯発達から見る「軽度」肢体障害者の障害の意味：重度肢体障害者と健常者との狭間のライフストーリーより. 質的心理学研究. 2002-04, 1, p.36-54.
塚田　守. ライフストーリー・インタビューの可能性. 椙山女学園大学研究論集（社会科学篇). 2008-03, 39, p.1-12.
やまだようこ. “第Ⅰ部 6章 ライフストーリー研究：インタビューで語りをとらえる方法”. 教育研究のメソドロジー. 秋田喜代美, 恒吉僚子, 佐藤学編. 東京大学出版会, 2005, p.191-216.
渡辺　深.「転職」のすすめ. 講談社, 1999, 219p.
渡辺　深. 転職の社会学：人と仕事のソーシャル・ネットワーク. ミネルヴァ書房, 2014, 313p.